

## 中学校NIE授業との連携による「総合演習：NIE入門講座」

平石 隆敏

(京都教育大学)

“General Integrated Seminar: Introduction to NIE” cooperated with NIE in Junior High School

Takatoshi HIRAISHI

2006年11月30日受理

抄録：教員免許必修科目である「総合演習」において、筆者は2003年度、2004年度、そして2006年度と「NIE入門講座」を内容とした授業をおこなってきた。大学での座学にとどまらず、NIE実践を体感してもらう目的で、2006年度は附属桃山中学校でのNIE授業「ハロー・ニュースペーパー」への参加を授業の一部に取り入れようと試みた。時間割の都合で参加できた学生は少数であったが、中学生と大学生との三回のコラボレーション授業の試みにより多くの成果をえることができた。

キーワード：NIE、新聞活用、総合演習

### I. はじめに

1998年の教員免許法改正により、「教職に関する科目」として「総合演習」（2単位）が新たに設置された。この科目は、「人間尊重・人権尊重の精神はもとより、地球環境、異文化理解など人類に共通するテーマや少子・高齢化と福祉、家庭の在り方など我が国の社会全体に関わるテーマについて、教員を志願する者の理解を深めその視野を広げるとともに、これら諸課題に係る内容に関し適切に指導することができるようにする」ことを目的として、「上記のような諸課題のうちいくつかについて選択的にテーマを設定した上で、ディスカッション等を中心に演習形式の授業を行う」ものである（1997年7月 教育職員養成審議会「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」より）。

京都教育大学では、「総合演習」は3回生前期または後期配当の必修科目とし、2003年度から開設された。担当教員それぞれが様々なテーマでクラスを開講しており（たとえば2006年度では「食教育」「ものづくり」「子どもとメディア」など18クラスを開講）、学生は希望するテーマの授業を選択して受講するようになっている。また設置の趣旨にしたがって、実践的な演習形式の授業ができるよう1クラスの受講生数は20名以下である。

筆者は2003年度と2004年度、そして2006年度に、この「総合演習」を担当し、いずれも「NIE（新聞活用教育）入門」を内容とした授業をおこなってきている。

日本において、授業における新聞活用は長い歴史をもっており、明治初期に新聞が創刊され始めた直後には、すでに実践例が見られるともいわれている。現在でも、学校教育の中で個々の教員が何らかの形で新聞を利用するという光景はめずらしいものではない。

こうした新聞利用・新聞活用は、1989年頃から「NIE (Newspaper in Education)」として組織的に展開されはじめた。そして現在では、学校教員・教育委員会・新聞社の三者による「NIE推進協議会」が43都道府県に設置されており、また日本新聞教育文化財団の指定を受けた「NIE実践校」は2006年度には小中高等学校全体の約1.2%にあたる490校にものぼっている（日本新聞教育文化財団HPより）。

したがって、新卒教員や異動教員の配属先が何らかの形でNIE実践に取り組んでいるという可能性は、けっして少なくはない。また新聞活用そのものも、学校教育の中で教育目標を達成するための有効な方法として様々な可能性をもっている。<sup>1)</sup> これらのことから考えて、教員養成課程において教員をめざす学生が「教員としてのレポーター」の一つとしてNIEの基本について学ぶ機会をもつことは意味があるといえるだろう。<sup>2)</sup>

## Ⅱ. 「総合演習：N I E入門講座」の概要

2006年度後期に筆者が実施した、「総合演習：N I E入門講座」の概要は以下の通りである（2006年度・講義シラバスより作成）。

### ◎ 授業の概要

新聞は、学校教育において様々な形で活用することができる。本授業では、こうした新聞活用の意義と方法について、実践例の検討やグループワークなどを通じて理解を深めていく。なお、N I E授業への参加や公開授業参観などもおこなう。

### ◎ 授業の到達目標

「新聞を授業の中で活用しよう」という「N I E (Newspaper In Education)」について、その基本的な考え方、総合的学習や教科学習においてニュースや新聞などを取り入れることの意義、さらに様々な授業実践例などを学び、N I Eを教師としてのレパートリーの一つにすることを目標とする。

### ◎ 授業計画

- 第1週 0.授業のガイダンス
- 第2週 1.N I Eって何?
- 第3週 2.Fフォーカス（ファミリー・フォーカス、フレンド・フォーカス）
- 第4週 3.新聞について知ろう：3.1新聞を見てみよう
- 第5週 3.新聞について知ろう：3.2新聞というメディア
- 第6週 4.資料・導入の材料としての新聞利用
- 第7週 5.新聞は何年生から使えるか
- 第8週 6.写真・グラフ等の活用
- 第9週 7.記事の比べ読み：記事や紙面の違いを読み取る
- 第10週 8.メディア・リテラシー：8.1ニュースは客観的か？
- 第11週 8.メディア・リテラシー：8.2クリティカルな読み手を育てる
- 第12週 9.新聞の形での発信／新聞への発信
- 第13週 10.新聞スクラップ、朝のスピーチ
- 第14週 11.新聞利用と著作権

N I Eは「新聞利用」そのものを目的としているのではなく、新聞利用は教育目標をより効果的に達成するための手段・方法にすぎない。したがって、有効だと思われない場面では無理に新聞を使う必要はないし、別にもっと効果的な方法があれば、それをもちいれればよいのである。ただし新聞利用・活用という方法は、思ったよりも有効である場合が多く、また様々なねらいに応じた多種多様な活用可能性がある。このことが、この授業で受講生に伝えたいと考えていることである。

今回は新聞の活用可能性について、「つなぐ」というキーワードで整理して示した。

- i) 学習内容につなぐ：子どもたちの関心を高め、学習内容へとつないでいくための導入としての新聞記事利用。
- ii) 「いま」へとつなぐ：資料集よりも新しい情報やデータが載った「最新資料集」としての新聞記事の利用。
- iii) 社会につなぐ：社会の出来事や動きに関心をもちさせるキッカケとしての新聞利用。なお、日本新聞教育文化財団の調査によれば、N I E実践に関して教員の期待がもっとも大きいのは、この側面である。<sup>3)</sup>
- iv) 活字へとつなぐ：活字離れを防ぎ、文章を読むことに親しむための新聞利用。とくに新聞記事は、テレビなどの流れ去っていく情報メディアと異なり、熟読的・反省的な情報メディアである。また、いわゆる「PISAショック」以来、指摘されている「読解力」の向上という点でも、活字だけでなくグラフや表、写真などを含めた総合的な情報の論理的読み取り能力を育成する新聞利用は有効と思われる。
- v) 情報社会へとつなぐ：新聞紙面や記事の構成、新聞社の仕事、新聞の比較読みなどを通じて、マス・メディアが提示する情報は一定の観点や意図から再構成されたものであることを学ぶメディア・リテラシー教

育として。

vi) 人とつなぐ：新聞を題材としたスピーチや意見交換、新聞の形での情報発信などによる、人をつなぐ媒介としての新聞活用。

授業計画は上記の通りで、NIEの歴史や現状などについての概説の後、様々な切り口での新聞活用・利用のあり方について取りあげる。内容としては、理論の解説というよりも、実践例を検討したり、実際に新聞を使った活動をおこなってみたりする実践的なものが中心である。

なお第3週と第6週は、後述する附属中学校との連携の日程の兼ね合いで、ここに配置している。

### Ⅲ. 附属桃山中学校「ハロー・ニューズペーパー」とのコラボレーション

多くのNIE実践者が語るように、新聞活用の大きな魅力は「教室に新聞をもちこむと子どもたちがいきいきする」「クラスの雰囲気が変わる」という点にある。しかし大学での授業の中だけで、こうした実際のNIE授業の雰囲気を実感することは困難である。そのため、2003年度と2004年度の授業ではNIE授業の参観<sup>4)</sup>を取り入れた。

さらに2006年度は、大学生たちに実際にNIE授業の中にはいって学んでもらう、つまり「参観」にとどまらず「参加」という形の新しい試みをおこなうこととした。

京都教育大学附属桃山中学校では、総合的学習の時間の一部を「MET(Momoyama Explorer's Time)」と名づけ、2・3年生が自分の興味関心にあわせてクラスを選択して、主体的な課題解決型の学習活動をおこなっている。その中の1クラスが、神崎友子教諭が担当している「ハロー・ニューズペーパー」というNIEの取組みである。これは2005年度と2006年度はNIE実践校の指定も受けている。そして今年度の「ハロー・ニューズペーパー」は、10月までに新聞スクラップ、5W1Hの読み取り、新聞社見学、記者講演会などの取組みをおこなってきている。

そこで神崎教諭に協力いただき、下記のような形で、この授業の中に大学生を参加させていただき、中学生と大学生のコラボレーション授業をおこなうこととした。

日時 10月18日(水)、11月1日(水)、11月18日(水)、午後1時40分～3時30分の「ハロー・ニューズペーパー」の時間

活動形態 基本的には「中学生と大学生がグループをつくり、新聞記事を題材にして話し合う」というスタイル。ただし、グループ内での大学生の位置づけは毎回異なるものになるようにする。

第1回 中学生と大学生がお互いに親しむことを目的として、同じ土俵に立つ「仲間同士」というスタンスで、新聞記事を題材とした友達同士での話し合い(「フレンド・フォーカス」<sup>5)</sup>)をおこなう。テーマは「喜怒哀楽を探そう」。

第2回 中学生と大学生という「異なる世代に属するもの」という立場でのディスカッション。具体的には、就職を間近にひかえた大学生と、まだ将来を明確に意識していない中学生とが、ニート問題を題材に「働くことの意味」をめぐってディスカッションする。

第3回 「ハロー・ニューズペーパー」では11月22日に東京証券取引所から講師を招き、株式の仕組みについての学習をおこなう。そこで、それに向けた事前学習として、「村上ファンドの村上代表は、なぜ逮捕されたのか」について、関連する新聞記事を使いながら考える。ここでは大学生は、中学生の学習をうながすアドバイザーとして位置づける。

※ なお三回とも、大学生は、記事の中で中学生がわからない言葉が出てきたときの解説役も兼ねる。

ただし、今回この連携をおこなうにあたって、大きな問題となったのは授業時間についてである。大学の「総合演習」の時間は火曜日の12:50～14:20であるが、中学の「MET」の時間は水曜日の13:40～15:30におかれている。したがって、「総合演習」の時間をそのままコラボレーションに充当するわけにはいかず、水曜日の「MET」の時間帯に参加可能な者のみの任意参加とせざるをえなかった。とくに大学では水曜日の午後は、

授業こそ設定されていないものの、クラブ活動や様々な説明会などの時間にあてられているため、実際に参加できた学生は少数であった（やむをえず受講生以外の参加を求めた回もあった）。そのため今回の連携は、「総合演習」のNIE講座の中に正式に組み込むという形ではなく、NIE講座からは切り離れた形でおこなわざるをえなかった。ただ、NIE講座の第3週と第6週の授業は、コラボレーションの事前学習という意味を含めておこなったものである。

#### IV. 第1回コラボレーション

日時 10月18日（水） 午後1時40分～3時30分

参加者 中学生16名、大学生6名

テーマ 「喜怒哀楽」の記事を探そう

1回目は、新聞記事を題材に気軽に意見交換ができるようなスタイルで「フレンド・フォーカス」をおこなった。テーマを「喜怒哀楽の記事を探そう」とし、「喜」「怒」「哀」「楽」のどれか一つに当てはまる新聞記事を各自が選び、その後、グループで意見交換をするという活動である。

この活動の一つのねらいは前述のように中学生の緊張感をほぐすことにあるが、それ以外にも、一般にこのスタイルの活動では、他人の発表を聞くことを通じて、自分とは違うものの見方や感じ方に気づくこと、さらに協議の中で他人の意見を理解し、また自分の考えも深めていくことが期待できる。

なお大学生には、こうした趣旨を理解し、活動内容を理解しておいてもらうために、あらかじめ前日の総合演習の授業時に、同じようなスタイルでのフレンド・フォーカスの実践をおこない、その趣旨やねらいなどについての解説もおこなった。

さて、第1回のコラボ授業の具体的な内容は以下の通りである。

◎ 配布資料：全員に行き渡るだけの新聞、ワークシート

- 1) A～Eの5グループ（中学生2～4名と大学生1～2名で、各グループ4～5名）に分かれ、中学生の中から進行役を決める。その後、各自で新聞を読みながら「喜怒哀楽」の記事を探す。
- 2) 記事を選び終えたら、下のようなワークシート<sup>6)</sup>に切り抜いて貼り [1]、また「喜怒哀楽」のどの字に当たるか [2] と選んだ理由を簡単に書く [3]。
- 3) グループで、メンバーの選んだ記事を回し読みする。
- 4) グループの「イチオシ記事」を協議して選ぶ。
- 5) 全体で、各グループから「イチオシ記事」の要約と選んだ理由を発表する。
- 6) 自分が選んだ記事について、選んだ理由を400字程度に文章化する [4]。
- 7) 今日の授業の学びの振り返り [5]。

[ワークシート]

<p>新聞から「喜」「怒」「哀」「楽」を探そう          ( )年 氏名 ( )</p> <p>1 あなたが選んだ記事を貼りましょう。          ( )新聞 2006年 月 日 朝刊/夕刊</p> <p>2 あなたの記事は「喜」「怒」「哀」「楽」のどれですか?          ( )</p> <p>3 この記事を選んだ理由を簡単に書きましょう</p>	<p>4 記事を選んだ理由を400字程度で書きましょう。</p> <table border="1" style="width: 100%; height: 100px;"> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> <tr><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr> </table> <p>5 友だちや大学生との話し合いの授業でどんな学びが得られましたか?感想を書きましょう。</p>																																																																																

最初に各自で記事を探すとき、NIE実践においてしばしば見られることだが、大学生はもちろん、中学生たちも興味深そうに、熱心に新聞に没頭する様子が見られた。また、その後のグループ協議においても、中学生・大学生ともすぐに打ち解けて、和気藹々と意見交換や話し合いが進められていたようである。このスタイルの活動が、「正解」を求めるのではなく、自分の興味や関心に応じて自由な意見や感想を述べたり、互いに意見交換したりしやすいものであることにもよると思われる。

なお、各グループから「イチオシ記事」として出された記事は以下のようなものであった。

A「米国のアーミッシュの学校での銃乱射事件で、一人の女子が年下の子どもたちを救うため「私を先に撃って」と言ったという記事」

：「哀」 …自分と同じくらいの子どもの勇気ある行動に感動した。

B「福岡で中二男子がいじめで自殺したという記事」

：「怒」 …引き金となった教師や、その後の学校の対応に腹が立つ。哀よりも怒。

C「奈良小一女兒殺害事件で小林被告に死刑判決が出たという記事」

：「怒」 …判決時の被告の態度に怒りを感じる。

D「ディープインパクトがフランス凱旋門賞で3着になったという記事」

：「喜」 …世界の舞台で銅メダルに当たる3着は立派。

E「各地で産科医が不足しているという記事」

：「哀」 …自分が将来、家庭をもったときのことを考えると不安になる。

最後に、今日の授業の振り返りがおこなわれたが、中学生からは「新聞は、ただ単に出来事を伝えているというだけではなく、様々な喜怒哀楽が詰まっているのだと感じた」、さらに「みな意見が少しずつ違っているということが興味深く感じた」、「人と話し合い掘り下げていくことが楽しかったし、自分の考えも深まったように思う」などの感想が出された。これは、まさにこちらが期待したねらい通りのものである。また大学生たちは、中学生たちが予想以上に難しい記事を取り上げ、しっかりとした意見をもっていたことに感心したようであった。

## V. 第2回コラボレーション

日 時 11月1日(水) 午後1時40分～3時30分

参加者 中学生18名、大学生7名

テーマ 「ニート問題」について話し合おう

2回目は、前回とスタイルを変えて、グループでのディスカッション形式でおこなった。テーマは「ニート問題」である。ここでは二つのねらいを設定した。まず、一般に教室でのディスカッションは同じような立場にある水平的な関係の中でのものになりがちだが、そうではなく、就職を具体的に意識しはじめている大学生と、就職はまだ遠い将来のこととして漠然としか意識していない中学生という異なる世代の間での、垂直的な関係におけるディスカッションをおこなうことである。これにより、普段の仲間同士の間ではなかなか接することのできないような考え方や意見に双方が触れることができるだろう。また、中学生に「働くことの意味」について考える機会をもってもらふキャリア教育ということも、もう一つのねらいとした。

◎ 配布資料：ワークシート、新聞記事の資料〔①「ILOの調査によると、ニート問題が日本だけでなく先進国全体の問題となっている」という内容の記事〔2006年10月30日、読売新聞〕、②ニート問題が社会問題として注目され始めたときの記事〔2004年9月10日、産経新聞〕、③ニート問題の解説記事〔2004年10月2日、朝日新聞日曜版Be〕〕

1) 全体で導入をおこなう。配布資料の新聞記事①を紹介し、「ニートとは何か、なぜニートが生まれるのかについて考えよう」というテーマを提示する。

2) A～Eの5グループ(前回とは異なるグループ分けで、各グループ5名)に分かれ、中学生の中から進行役を決める。まず各自で、配布資料の「ニート問題」に関する記事②③を読み、わかったことをワークシートに

- 書く [2]。その際、理解できない言葉を書き出し [1]、大学生に聞く。
- 3) グループ討議Ⅰ：なぜニートが生まれるのか [3]。その後、全体で各グループから報告。
  - 4) グループ討議Ⅱ：今後、ニート問題にどう対処すればよいか [4]。その後、全体で各グループから報告。
  - 5) グループ討議Ⅲ：なぜ働くことは大切なのか [5]。その後、全体で各グループから報告。
  - 6) 各自で、「10年後、自分は何をしていると思うか」について考える [6]。
  - 7) 今日の授業の学びの振り返り [7]。

[ワークシート]

<p>「ニート」問題について話し合おう！                  ( )年 氏名 ( )</p> <p>1 理解できなかった言葉</p> <p>2 「ニート」とはどんな人のことをいうのか。</p> <p>3 なぜ「ニート」が生まれると思うか。                  ①自分の意見</p> <p>②班や全体で出た意見</p> <p style="text-align: center;">-1-</p>	<p>4 今後どうしたらいいと思うか。                  ①自分の意見</p> <p>②班や全体で出た意見</p> <p>5 なぜ、働くことが大切なのか。                  ①自分の意見</p> <p>②班や全体で出た意見</p> <p style="text-align: center;">-2-</p>
-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>6 10年後、自分は何をしていると思うか。</p> <p>7 友達や大学生との話し合いの授業でどんな学びが得られましたか？</p> <p style="text-align: center;">-3-</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------------------

今回は「知識をえて理解する」という部分が多く、また内容的にも中学生にはやや難しいと思われることから、グループでの討議を三ステップに分け、それぞれのステップの理解を全体で再確認してから次のステップに移るという形式をとった。また、記事には中学生には難しい言葉（たとえば「非労働力人口」「目標管理制度」「年俸制」「刹那的な生き方」等）が多く見られるため、大学生には丁寧に解説するよう指導しておいた。

そのためか、難しいテーマであるにもかかわらず、中学生たちは予想以上にきちんと問題を理解し、深く考えてくれたように思われる。

なお、各グループからは、各討議において以下のような意見が出された。

◎ グループ討議Ⅰ：なぜニートが生まれるのか。

A：「働かなくても何とかなる」という考えがあるから。将来に希望がもてないから。

- B：無理して働かなくても生きていけるから。国が甘やかしすぎているから。夢や目標がないから。
- C：夢や目標がなく、日常に満足してしまうから。
- D：人間関係に失敗し臆病になり、またうまくいかなくなるという悪循環が起こる。働くことの意味が見出せないから。日本が豊すぎるから。
- E：周りの人々が甘やかしているから。インターネットが普及して、引きこもりの人が増えたから。

◎ グループ討議Ⅱ：今後、ニート問題にどう対処すればよいか。

- A：働く意欲をもたせるような体験の機会を与えるキャリア教育。転職や学び直しができるようにする。
- B：ニートが働きやすい環境をつくる。働くことについてのプラスのイメージづくり。夢をもてるような社会にする。
- C：強制的に色々な体験をさせてはどうか。
- D：ニートを受け入れる側の体勢づくり。本人がやる気を出せるような雰囲気をつくること。
- E：職業体験を通じて、達成感を味わうことが必要。

◎ グループ討議Ⅲ：なぜ働くことが大切なのか。

- A：病院で働く人がいないと困るように、皆で互いに支えあうため。
- B：仕事を通じて人間関係をつくる。働くことを通じて社会の一員としての自覚をえる。社会への貢献。
- C：お金を稼ぐため。
- D：生きがいが必要だから。仕事を通じて、社会に必要とされる自分の存在価値を確認することができる。人間関係をつくる。
- E：働くことは楽しいから。一人前の人間として自立するため。

とくに討議Ⅲでは、「働くことの意味」について、「お金を稼ぐため」ということ以上に、どれだけ積極的な意味づけができるか当初は心配していたが、「社会の中での自分の存在価値の確認」や「皆で互いに支えあう」など予想以上に深い議論がなされたように感じる。大学生の考え方や経験が、中学生にとっても刺激となったものと思われる。

ただ、自分にとっての「働くこと」のイメージをより具体的にもたせるために、「10年後、自分は何をしていると思うか」について想像させたが、やはり中学生にとってはなかなか具体的にイメージすることはできなかったようである。

## VI. 第3回コラボレーション

日時 11月8日(水) 午後1時40分～3時30分

参加者 中学生18名、大学生6名

テーマ 「株」の仕組みについて知ろう

最後の3回目は、「株の仕組み」をテーマとしている。「ハロー・ニューズペーパー」のクラスでは11月22日に東京証券取引所から講師を招き、株式の仕組みについて学習をおこなうが、この回は、そのための事前学習として位置づけた。したがって、これまでの回よりも「学習」という面が強いものであり、また大学生にも各グループでの学習のアドバイザー役を果たしてもらうこととした。ただし、この分野については大学生も十分な知識や理解をもっていない者が多いと思われるため、前日の総合演習の時間に、ほぼ当日の授業の流れにそった事前学習をおこなった。

◎ 配布資料：全員に行き渡るだけの新聞、ワークシート、新聞記事の資料(①「みずほ証券のジェイコム株誤発注」の記事[2005年12月9日、毎日新聞]、②「トヨタ自動車の9月中間決算」についての記事[2006年11月8日、日本経済新聞])

- 1) 前回、課題として出されていた「株式関連記事のスクラップ」の確認。
- 2) 全体で導入。2006年6月6日の産経新聞一面トップの「村上ファンド前代表の村上世彰氏が逮捕された」という記事を提示し、「村上前代表は、なぜ逮捕されたのだろうか?」という問いを發し、今日のテーマ「株の仕組みについて知ろう」を提示。

- 3) A～Eの5グループ（各グループ4～5名）に分かれる。
- 4) グループ学習Ⅰ：「株」「株式会社」とは何か [1]。
- 5) グループ学習Ⅱ：「株」をもつことのメリットは何か [2]。
- 6) グループ学習Ⅲ：「株」はどのように買うのか [3]。新聞の証券面や資料①を参考にする。
- 7) グループ学習Ⅳ：「株で儲ける」とはどういうことか [4]。新聞の証券面を参考にする。
- 8) グループ学習Ⅴ：業績を上げそうな会社をどう見分けるか [5]。資料②を参考にする。また、最初の問い「村上前代表はなぜ逮捕されたのか」についても考える。
- 9) グループ協議Ⅵ：この一ヶ月で伸びそうな会社を探そう [6]。証券面を見ながら、一ヶ月後に業績が伸びそうな会社を探す。その後、全体で発表。
- 10) 今日の授業の学びの振り返り [8]。

中学生には身近ではないテーマであり、また2年生はまだ公民的分野の学習で当該内容について十分に学んでいないこともあって、内容理解にはかなり苦勞した生徒が多かったようである。しかし一部には、この分野にかなり高い関心と知識をもっている生徒もおり、グループによってはその格差にうまく対応するのが難しい場面も見られた。ただ今回の授業の目標は、次回に向けて、(おそらく聞いたことはあるが、よくは知らない)「株」、「株式会社」、「株で儲ける」などの事柄について基本的な理解をえてもらうことにあり、それはある程度、達成されたように思われる。

[ワークシート]

<p>「株」の仕組みについて知ろう！ ( )年 氏名 ( )</p> <p>1 「株」・「株式会社」とは何か？</p> <p>2 「株」をもつことのメリットは？</p> <p>3 「株」はどのように買うのか？</p> <p style="text-align: center;">-1-</p>	<p>4 「株」で儲けるってどういうこと？</p> <p>5 利益をあげそうな会社をどうやって見分けるか？</p> <p>6 この一ヶ月でどの会社が伸びそうか予想しよう</p> <p style="text-align: center;">-2-</p>
---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------	---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

<p>7 東京証券取引所の方に質問してみたいこと。</p> <p>8 今日はどんな学びが得られましたか？</p> <p style="text-align: center;">-3-</p>
-------------------------------------------------------------------------------------------------

なお、今回のようなテーマで授業をおこなうに際しては、「株で儲ける」ことのみを生徒の関心が向かうことのないよう、「株」を通して、産業の仕組みや社会と産業の様々な動きについて理解することに焦点を当てるようにした。またそのために、「社会の動きを考えながら、これから伸びそうな会社を探す」というグループ協議

VIを設定した。この活動は、よくわからないなりに生徒たちはかなり高い関心を示し、どのグループも活発な協議をおこなっていた。各グループの協議結果は以下の通りである。

- A：任天堂 ……近く新製品の発売があり、人気が出そうだから。
- B：任天堂 …… 同上
- C：ソニー ……新製品が発売され、人気を集めているから。
- D：アデランス ……これから寒くなるのでカツラがよく売れる。また、いまのストレス社会では、カツラの需要が高まるのではないか。
- E：大丸 ……これから歳暮・クリスマス商戦を迎え、業績が上がりそう。

これらは、本来の「株価の予想」という点では、かならずしも正しいものとはいえないだろう。しかし、株を通して社会や産業の動きについて考えるという点では、満足できるものだといえるのではないか。

また生徒の感想では、「株価には様々な要素が影響を与えることがわかった」、「株に興味をもった」などが出された。

## VII. まとめに代えて

以上のように「総合演習：NIE入門講座」に連動させた形で、附属中学校でのコラボレーション授業を試みたわけだが、いくつかの成果とともに、また課題も明らかになったように思われる。

まず第一に、大学の授業での座学や模擬授業的な形ではなかなか伝わりにくいNIE授業の魅力や有効性について、このように実際のNIE授業の中にはいって感じてもらうという要素を取り入れることは、かなり効果的であると思われる。実際、参加学生からは「実際にやってみて、面白さがよくわかった」という感想が聞かれた。

また第二に、教員養成課程のNIE入門講座に関してというよりも、学校でのNIE授業についての成果である。すでに親子での「ファミリー・フォーカス」については様々な実践例やその有効性が報告されているが、それ以外にも、今回の中学生と大学生というように異なる世代や立場の者を交えた形での新聞活用の可能性を考えることができるのではないか。それは、生徒がよくわからない言葉についてきめ細かく解説しながら授業を進めることができるという利点だけではない。一般に新聞を読むことは、いままで知らなかったこととの出会いをもたらしてくれるが、そこに教室という比較的均質な集団に異質な要素が加わることは、さらに二重の出会いを可能にしてくれる。たしかに実際に学校教育の中でこのような場を設定することは簡単ではないが、たとえば京都市立洛南中学校の「いきいきトーク」の実践<sup>7)</sup>なども参考になるだろう。

しかし課題としては、まず先述のように、今回の試みを「総合演習」の授業そのものに組み込むことができなかったことがあげられる。NIE入門講座の受講生20名のうち、実際に中学校でのコラボレーション授業に参加できた学生は7名にとどまった。2003年度、2004年度のNIE授業参観の場合でも、日程の関係で参加できた学生は三分の二程度であったが、今回はそれよりもさらに少ない学生しか体験することができなかった。今回の試みの有効性が感じられるだけに、次の大きな課題は多くの学生の参加をどのように確保できるかということである。

また、ある程度の数の学生がNIE授業に参加しようとする場合、もっともやりやすいのは今回のようにグループ活動に参加するという形態である。それぞれの回で大学生の位置づけを変えることでバリエーションをつけることができたと思われるが、それでも活動内容はかなり限られたものにとどまる。学生の参加が可能な、また別の形でのNIE授業のスタイルについても、今後は検討していきたいと考えている。

最後に、教員養成課程におけるNIE入門講座の適切なカリキュラムについても触れておきたい。今回のようにNIE授業への参加という要素を取り入れることはNIE入門講座にとって有効だと思われるが、全体としてその授業内容をどのように構成すべきかについては、まだまだ検討の余地は大きい。昨年度からは、横浜国立大学や北海道教育大学でも教員養成課程でのNIE入門講座の試みが開始されたが、今後はそれらと連携しながら、さらに教員養成課程でのNIE入門講座のあり方についての検討を進める必要があるだろう。

なお、今回の試みについて多大なるご協力をいただいた京都教育大学附属桃山中学校の神崎友子教諭、ならびに大学生とのコラボレーション授業につきあってくれた「ハロー・ニュースペーパー」の受講生の皆さんに、心より感謝申し上げます。

## 注

- 1) 平石隆敏 (2005) 「NIE で何ができるか」、京都教育大学附属教育実践総合センター『教育実践研究紀要』第5号、pp.11-20を参照。
- 2) 2005年度には岡山県、新潟県など10組織が、新人教師研修プログラムの中でNIE講座を開設している。影山清四郎編 (2006) 『学びを開くNIE』晩成書房、p.21参照。
- 3) 日本新聞教育文化財団による「2002年度・NIE実践効果測定調査」より。
- 4) 2003年度は京都市立山階小学校、2004年度は京都市立洛南中学校にご協力いただいた。
- 5) よく知られているのは親子で新聞記事について話し合う「ファミリー・フォーカス」であるが、これは米国において、とくに家庭での新聞活用に焦点をおいた活動として名づけられたものである。「フレンド・フォーカス」は、クラスのグループの中で類似の活動をおこなうことを指し、活動そのものはめずらしいものではないが、それを筆者が「ファミリー・フォーカス」との類比で名づけたものである。
- 6) なお以下に示したものは、当日使用したワークシートそのものではない。そのおおよそのイメージを示したものである。
- 7) 京都市立洛南中学校では、2005年11月、中学生と地域の大人とがグループを作り、中学生が提示した「気になる記事」について意見交換をするという「いきいきトークin洛南」をおこなった。(京都新聞 Web版 2005.11.17記事より)

なお本研究は、平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(C)・課題番号18520011)による研究成果の一部である。